



| | |
|--------------|---|
| Title | Acquisition of English Spatial Prepositions by Japanese Learners of English. with Particular Reference to their Non-Spatial Senses |
| Author(s) | 林, 正人 |
| Citation | 大阪大学, 2007, 博士論文 |
| Version Type | |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/58810 |
| rights | |
| Note | 著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。 |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

| | |
|---------|---|
| 氏 名 | 林 正人 |
| 本籍（国籍） | |
| 学位の種類 | 博士（言語文化学） |
| 学位記番号 | 甲 第 80 号 |
| 学位授与年月日 | 平成19年3月23日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 課程博士 |
| 研究科及び専攻 | 言語社会研究科言語社会専攻 |
| 学位論文題目 | Acquisition of English Spatial Prepositions by Japanese Learners of English with Particular Reference to their Non-Spatial Senses |
| 論文審査委員 | 主 査 教 授 杉 本 孝 司 副 査 教 授 兼 田 英 二 副 査 教 授 上 田 功 副 査 教 授 苧 阪 満里子 副 査 教 授 林 田 理 恵 |

論文の内容要旨

本研究は、「言語転移」と「プロトタイプ論」との枠組みで、日本人学習者による英語の前置詞の習得過程を明らかにするものである。近年、この枠組みで英語の多義語の意味習得を研究する試みが増えてきている。それらは、1) プロトタイプ性の高い語義が先に習得される、2) 語義の習得及び語義ネットワーク形成には学習者の母語の影響が見られる などの結論を出している。しかしながら、前置詞の習得研究においては、少数の例外を除き、in despair の in に見られるような抽象的拡張の度合いの高い語義（抽象的語義）の習得を論じたものはない。また、母語からの転移を論じる際も、母語と英語との語彙レベルにおける対応のみに注意が向けられることが多いのが現状である。

本研究は、従来の研究に見られるこの二つの問題点の解決を試みるものである。この目的のため、英語の前置詞 at, in, on を取りあげ、以下の仮説を検証した。仮説検証のため、英語習熟度において異なる日本人学習者三グループ及び英語母語話者グループを被験者として、産出テスト・類似性判断テスト・容認性判断テストを行った。尚、日本人学習者、英語母語話者とも、テストそれぞれで異なる被験者集団を用いた。

仮説 1 日本語からの転移は、日本人被験者による各前置詞の語義ネットワーク形成に影響を与える

仮説 2 被験者の習熟度の上昇は、各前置詞の語義ネットワークの発達に異なる影響を与える

仮説 3 プロトタイプ性の高い語義が、必ずしも習得が容易とは限らない

仮説 4 被験者の習熟度の上昇は、各前置詞の習得に異なる影響を与える

仮説5 日本語からの転移は、どの習熟度レベルにおいても概念レベルで作用するが、その影響は前置詞によって異なる

仮説6 各前置詞の語義ネットワークとその習得との間には関連がある

本論文は、六章から成る。第一章では、本研究の目的を論じた。語彙習得研究において抽象的語義の習得を扱うことの重要性を述べ、また、言語転移を新たな視点から見直すことの必要性を論じた。

第二章では、本研究の理論的枠組みについて論じた。プロトタイプ論について述べ、認知言語学者による前置詞の語義ネットワークモデルを紹介した。次に、言語転移の研究の歴史的展開を概観し、その後、現在注目を集めつつある概念転移について述べた。また、言語転移とプロトタイプ論との枠組みで行われた英語の前置詞・動詞の習得研究を概観した。それらを踏まえて、第二言語習得研究における本研究の意義を明らかにした。さらに、本研究において検証する仮説を、仮説設定の妥当性とともにも明示した。

第三章では、産出テストによる実証的研究を扱った。このテストでは、各前置詞を用いて英文を産出することを被験者に求めた。この目的は、各前置詞のプロトタイプの用例を確定することであり、これは次章においてプロトタイプの語義を確定するための必要な手続きであった。

産出された用例は、Rice (1996) に倣い、*spatial*、*temporal*、*abstract* に分類した。その結果、*temporal* に属する用例の産出が多かった初級・中級被験者群の *at* 以外は、*spatial* に分類される用例が、プロトタイプの用例であることが明らかとなった。また、日本人被験者の用例産出においては、日本語の影響が見られたが、その現れ方は前置詞によって異なっていた。前置詞 *at* の場合は、*temporal*、*spatial* において日本語の影響が見られ、*abstract* においては見られなかった。一方、*in* の場合には、*spatial* に加え、*abstract* においても日本語の影響が見られた。また、*on* においては、*spatial* に属する用例の産出において、日本語がその産出を制限する現象が確認された。しかし、*abstract* においては、日本語の影響は見られなかった。各前置詞の用例の産出における日本語の影響の現れ方のこのような違いは、各前置詞の各語義の根底にあるイメージ・スキーマの透明性が関連していると考えられる。

第四章では、類似性判断テストによる実証的研究を扱った。このテストでは、各前置詞の各用例間の類似度を被験者に判定させ、彼らが各前置詞をどのように捉えているかを調査した。これにより、各前置詞のプロトタイプの語義が決定され、上記の仮説1及び2の検証が可能となった。被験者の類似性判断は、多次元尺度法と階層クラスター分析により分析した。

クラスター分析の結果、各前置詞の類似性判断すべてにおいて四クラスターが採用された。これは、各被験者群が前置詞それぞれについて、四つの語義を認めているということである。また、類似性判断には、英語母語話者も日本人学習者もランドマークの属性を考慮していることが明らかとなった。多次元尺度法の結果より、*at* の場合は、日本人学習者のクラスターは英語母語話者

のクラスターほど緊密ではないことが明らかとなった。しかしながら、in 及び on に関しては、このことは観察されなかった。クラスター形成の際の転移の具体例は、at においてのみ見られた。よって、上記の仮説 1 を検証するには、十分なデータが得られなかった。

各クラスターの収束の様子から、at 及び on に関しては、習熟度が上がるにつれ日本人学習者の語義ネットワーク形成は英語母語話者のそれに近づくことが確認された。しかし、in の場合には、このことは確認されなかった。これは、in の各語義には、包含の概念が強く意識され、また、「～の中」と in は、比喩的拡張においてもかなりの程度類似していると日本人学習者が認識しているため、in の各語義は明確には区別されていないことによると考えられる。以上より、仮説 2 は支持された。

第五章では、容認性判断テストによる実証的研究を扱った。このテストでは、被験者に各前置詞の各用例の容認性を五段階で判定させ、彼らの習得の状況を調査した。この実験により、上記の仮説 3、4、5 及び 6 が検証された。

明らかとなった主な点は以下の通りである。前置詞 on に関しては、中位・上位群の場合は、プロトタイプの語義が最も習得しやすく、プロトタイプ性が習得に影響を及ぼした。さらに、上位群に関しては、at と in の場合も、プロトタイプの語義が最も習得しやすかった。しかしながら、それ以外の場合には、プロトタイプの語義が習得しやすいということは結論できなかった。よって、仮説 3 は支持された。

習熟度が上昇するにつれて、日本人学習者の容認性判断は向上するが、これは前置詞の違いによって異なる様相を呈した。前置詞 at に関しては、日本人被験者の容認性判断は低かった。このことは、日本人被験者が at を習得する難しさを示している。この理由は、ランドマークを「広がりのない点」と見なすことの難しさにあると考えられる。これに対して、正用例・誤用例を問わず、in の容認度は高かった。誤用例を棄却することは、上位群の被験者にとっても難しいことが明らかとなった。これは、包含の概念がかなりの程度普遍的であること、及び日本人学習者が、「～の中」と in を類似したものと認識することによると考えられる。これらに比して、日本人学習者は on の正用例・誤用例をかなり明確に判断した。三つの前置詞のなかでは、on は最も習得が容易であると考えられる。以上から、仮説 4 は支持された。

過剰拡張の現象も、前置詞によって異なることが明らかとなった。日本人学習者は、at をそれほど過剰拡張しない。これは、at で表される関係と「～で」や「～に」で表される関係は、概念レベルでは異なっており、また学習者もそれを認識しているためと考えられる。前置詞 in においては、過剰拡張が広く観察された。これは、概念レベルにおいても、「～の中」で表される関係と in で表される関係を類似したものと捉える日本人被験者の持つ傾向のためと考えられる。前置詞 on は、at と in の中間であった。これは、on が表す関係と「～の上」が表す関係は、概念レベルでは類似のものとは知覚されないが、「支持」の概念は、学習者にとってわかりやすいものであり、これが過剰拡張の原因となるためと考えられる。しかしながら、この「支持」の概念は、す

すべての用例において前景化されているわけではなく、また包含の概念ほどには普遍的ではないため、in ほどには過剰拡張が起これないと考えられる。以上のことから、仮説5は支持された。

用例の容認性判断と語義ネットワーク形成の関連は、at の場合は見られず、in の場合は上位群に、on の場合は中位群に見られるだけであった。これにより、仮説6は支持されなかった。これは、今井（1993）の wear の研究結果と合致しないものである。前置詞の習得は、動詞の習得とは異なる種類の問題を学習者に課すものと言える。

第六章では、本研究で行った実証的研究とその結果をまとめ、本研究の第二言語習得研究への貢献及び今後の研究課題について論じた。

本研究の最も大きな貢献は、言語転移に関する議論に新たな視点を提供したことにある。言語転移が概念レベルで起こりうるということを実証した本研究は、Kellerman (1983) の psychotypology 及び Andersen (1983) の transfer to somewhere をさらに発展させるものである。さらには、概念レベルにおける L1 と TL の間の知覚的な相違ではなく、知覚的な類似が転移の原因となることを明らかにした本研究は、Kellerman (1995) の transfer to nowhere に修正を迫るものである。

また、本研究は前置詞の教授にも重要な示唆を与えられと考えられる。近年、認知言語学で得られた知見を英語教育に生かす試みが見られるようになってきた。例えば、前置詞 in の様々な用法を教授する際、「～が容器と見立てられる」という説明がなされることが多い。しかしながら、本研究が示唆するように、英語母語話者が容器とは見立てないような事柄も日本人学習者は容器と見立ててしまう傾向がある。本研究は、教授者にこのような情報を提供しうると考える。

今後の課題としては、各前置詞の過剰拡張を、日本語以外の母語を持つ話者を被験者として調査することが挙げられる。日本語母語話者の場合と同様に、in が過剰拡張するのかを調査することは意義深いことである。また、本研究の結果を、縦断的研究で確認することも大切なことである。

論文審査の結果の要旨

審査は次の要領で行われた。先ず冒頭で論文審査申請者から申請論文の学問的意義付け及び今後の課題について簡単な説明を受け、次に申請論文に関して主査、副査の順で申請者に試問し、一巡した所で、再度主査から試問した。試問が完了した所で審査申請者及び聴講者に退室を求め、審査委員のみで論文の成績、最終試験の成績を合議した。論文審査の要旨は以下の通りである。

論文申請者（以下、著者）が検証しようとする仮説1～6は次の通りである（著者作成の「論文要旨」内容と重複するが以下に再録）。

- 仮説1 日本語からの転移は、日本人被験者による各前置詞の語義ネットワーク形成に影響を与える
- 仮説2 被験者の習熟度の上昇は、各前置詞の語義ネットワークの発達に異なる影響を与える
- 仮説3 プロトタイプ性の高い語義が、必ずしも習得が容易とは限らない
- 仮説4 被験者の習熟度の上昇は、各前置詞の習得に異なる影響を与える
- 仮説5 日本語からの転移は、どの習熟度レベルにおいても概念レベルで作用するが、その影響は前置詞によって異なる
- 仮説6 各前置詞の語義ネットワークとその習得との間には関連がある

これらの仮説は、もしその妥当性が検証されれば、いずれもこれまでの学説に修正をせまるものばかりであり、同時に日本における英語教育のあり方に対して示唆に富む提言を与え得るものであり、これら二つの意味で仮説の位置づけと意義は十分納得できるものであった。同時に、これらの仮説の検証に関わる論証の手法や資料の収集・分析方法に関する質疑が審査の中心を占めた。審査委員から出された疑問や指摘の主たるものは以下のようなものであった。

- (1) プロトタイプの設定方法が必要十分であるとは言えないのではないか
- (2) 著者が検証対象としている被験者群のレベル、特に初級レベルではプロトタイプやプロトタイプからの語義ネットワークという考え方が有効に働くのか
- (3) 多義性にも"automatic"なものもあれば"conscious"なものもあるが、この区別はどのように認識しているか
- (4) 語義ネットワークというものが機能語レベルで存在すると言えるのか、また存在するとした場合どのようなものであると言えるのかに関する考察が不十分ではないか
- (5) 用語及び概念としての ESL と EFL の使い方が首尾一貫していないのではないか
- (6) データ処理における統計的手法の中にやや問題と思える部分が複数箇所ある
- (7) 初級、中級、上級の学習者レベルの差が必ずしも日本人英語学習者の全域を反映するレベル分けとは言えないのではないか
- (8) 結論に基づく外国語学習への提言の中に、海外で既発表のものがある

これらを中心として著者と審査委員の間でやりとりがあり、問題のない回答とは言えないものもあったと考えるが、おおむね審査委員を納得させる回答となった。これら

以外にも論証のための議論の細かい点に関するやりとりが数多くあったが、いずれも特に問題があると認められるものではなかった。

これまでの日本人英語学習者の英語習得状況の研究成果に正面から疑問を投げかけ再考を促す意欲的な研究である本論文の性格からして、異論が飛び出す可能性は常に否定できないが、ややもすると安易な具象概念の分析で済まされる傾向の強いこの分野で、敢えて抽象的語義を取り上げ、語義の拡張の様子を異なる学習者レベルや英語母語話者と比較しながら仮説を検証していく手法は新鮮であり、同時にその成果が確認できた。また先行研究では形式的な語彙レベル（多くの場合は対応する訳語を用いる研究）による比較対照が主流である中、認知言語学のプロトタイプやイメージスキーマなどの考え方をを用いて概念レベルでの比較を、日本人英語学習者や英語母語話者間で行う手法は方法論的にも新鮮であり、そのような方法論を実践したことにも十分意義があると確認できた。また全体として、仮説を実証的に検証していく手法は、統計学的処理を駆使した客観性の高い堅実なものであり、高く評価できた。更に著者の分析や観察には興味あるものも多々あり、すでにこの分野の論文も数多くある著者の今後の研究が大いに期待されると同時に、本論文が博士号に十分値する労作であるという審査委員全員の一致した結論を得た。